

<別紙>

論文タイトル : 認知意味論における概念化の主体の位置づけについて  
著者名 : 本多啓  
タイトルの英訳 : **The Locus of Conceptualizer in Cognitive Semantics**  
ローマ字著者名 : **HONDA Akira**

<Abstract>

## The Locus of Conceptualizer in Cognitive Semantics

HONDA Akira (Surugadai University)

This paper examines the previous approaches to the following sentences and proposes a psychologically more plausible alternative, thereby discussing how the notion of conceptualizer should be treated in cognitive semantics.

- (1) a. The students get younger every year.  
(cf. I get older than the students every year.)  
b. Kyoto is approaching.  
We are approaching Kyoto.  
c. This car handles smoothly.  
We can handle this car smoothly.  
d. The cake tasted good.  
I tasted the cake.
- (2) He opened the door.  
The door opened very easily.

Sweetser and Iwata propose to account for (1a,b) in terms of the figure/ground reversal. On the one hand, however, there is a discrepancy between Talmy's notion of F/G and the original perceptual-psychological concept. Hence, an account of (1a,b) in terms of Talmy's notion is tantamount to a description that (1a,b) is an instance of the syntactic alternation between a movable/changeable entity and its reference entity. On the

other hand, Langacker's characterization of F/G is more close to the original Gestalt-psychological concept. However, when the fact that the reversal was presented as a counterexample to what was known as the constancy hypothesis is taken into account, Langacker's view also turns out to be inapplicable to (1a,b). The problem is the implication of the F/G account that in the two sentences in (1c), for example, the conceptualizer views the situation from the same vantage point. This runs counter to the intuition about these sentences. Similar arguments hold for (1c,d).

The same drawback is found in Langacker's "action-chain" analysis of (2), which also builds on the concept of F/G.

The above problem can be traced back to the fact that the approaches at issue fail to properly locate the conceptualizer in their frameworks.

My proposals are that the invisibility of the conceptualizer should be appreciated and that in (1c) the conceptualizer experiences the situation from different vantage points. This view is incompatible with the F/G and action-chain accounts.

As the background to my view, Tokieda's characterization of the two different perspectives that can be taken on language, which is in turn related to the view of subject in phenomenology, is mentioned.

# 認知意味論における概念化の主体の位置づけについて

本多啓 (駿河台大学)

## 1 本稿の目的

本稿では、次の (1) ~ (3) についての「図と地の反転」および「アクション・チェーン」による分析の問題点を検討したうえで、より自然な説明を提案し、最後にその説明の学史的な位置づけを試みる。この作業を通じて、認知意味論における概念化の主体の位置づけを考える<sup>1)</sup>。

(1) a. The students get younger every year. (仮想変化表現; Sweetser (1996))

b. I get older than the students every year.

c. Kyoto is approaching. (岩田 (1994))

d. We are approaching Kyoto.

(2) a. This car handles smoothly. (中間構文)

b. We can handle this car smoothly.

c. The cake tasted good. (連結的知覚動詞構文)

d. I tasted the cake.

(3) a. He opened the door.

b. The door opened very easily.

c. The door suddenly opened.

d. The door was opened. (Langacker (1991: 335))

## 2 図と地の反転による説明とその問題点

### 2.1 Sweetser (1996), 岩田 (1994)

(1a) と (1b) の関係について、Sweetser (1996) は図と地の反転による説明を提案している。また (1c) と (1d) の関係について、岩田 (1994) は注の中で、同じく図と地の反転による説明の可能性を示唆している。しかし、これらの現象を図と地の反転の例と考えることには問題がある。その問題は、一言で言うならば、(1) が視点に関わる現象であることを適切に捉えることができない、ということである。

だが、Sweetser と岩田が提案・示唆がなぜそのような問題をはらむのかを明らかにするためには、図と地の反転とはそもそもどのような現象であるかを明らかにしなければならない。現在の認知言語学におけるこの概念は、Talmy (1978, 2000) および Langacker (1987) の規定に基づいており、さらに彼らの概念は知覚心理学における図と地およびその反転に基づくとされている。そこで本稿ではまず、Talmy と Langacker の図地概念を紹介し、それを知覚心理学における議論と関連づけたうえで、それらを (1) および (2) ~ (3) に適用することの問題点を論じる。

## 2.2 Talmy (1978, 2000) の「図」と「地」

Talmy (2000) は彼のいう「図 (大文字の Figure)」と「地 (Ground)」を、次のように規定している。

- (4) The general conceptualization of Figure and Ground in language

The Figure is a moving or conceptually movable entity whose path, site, or orientation is conceived as a variable, the particular value of which is the relevant issue.

The Ground is a reference entity, one that has a stationary setting relative to a reference frame, with respect to which the Figure's path, site, or orientation is characterized.

(Talmy (2000: 312))

これを簡単にまとめてしまえば、「図 (F)」と「地 (G)」はそれぞれ (状態変化など、比喩的に理解されるものも含めた) 「可動物」「その位置などを評価するための基準点」となる。たとえば

- (5) a. The bike (F) is near the house (G).

- b. ? The house (G) is near the bike (F). (Talmy (2000: 314))

という2文において、(5a) においては、位置が固定している家を地 (G) と捉え、それを基準点として図 (F) である可動物の自転車の位置を表現している。これは状況に対する自然な捉え方であると言える。それに対して (5b) においては、位置が固定されていない自転車を地 (G) と捉え、それを基準点として図 (F) である移動不可能な家の位置を表現している。これは状況に対する自然な捉え方とは言えない。そのような捉え方の自然さの違いが、文の容認可能性の違いとして現れているわけである。

ここで注意すべきことは、Talmy の「地 (G)」には、この例文における “the house” のように、明らかに形をもつ「物」として捉えられるものが含まれるということである<sup>2)</sup>。

また、次の

- (6) a. John (F) is near Harry (G). (Talmy (2000: 315))

- b. My sister (F) resembles Madonna (G). (Talmy (2000: 318))

における “Harry” や “Madonna” のように、「広がりを持つ場」として捉えることに無理があるものも Talmy の「地 (G)」には含まれる。このような Talmy の「地」の規定は、次節に述べるように、知覚心理学における「地」の規定とは一致しないものである。

## 2.3 知覚心理学における図と地

ここで知覚心理学における「図 (figure)」と「地 (ground)」について簡単に紹介しておく。

日章旗を見る場合のように、視野が均質ではなく、中に異質な部分がある場合、その異質な部分が「図」として浮かび上がって見え、その周囲は「地」となる。このように視野が図と地に分割されることを「図地分化」という。

図は形をもつが、地には形がない。両者の境界線は輪郭線として図のみに所属する。図は前面に浮かび、地は図の背後まで広がっているように見える。また、図は注意をひきやすく、地は注意の対象となりにくい。

図は「物」として知覚され、地はそれが存在する「場」として知覚される。言い換えれば、「物」ないし「形」の知覚を支えているのがこの図地分化である。

このような規定によれば、「地」は「もの」個体としての性格を欠くはずである。

## 2.4 知覚心理学における図地概念との関連での、Talmy の概念の位置づけ

以上述べたように、知覚心理学における図と地の概念と、Talmy (1978, 2000) の規定する図と地の概念との間には、ずれがある(本多(2003))。これは、Talmy の意味での図と地の分化という概念は、知覚心理学的な裏づけを欠いているということである。したがって、(1a,c) を Talmy 的な意味での図と地の反転の例と考えることは、「可動物と非可動物が統語構造上入れ替わっている」という記述以上の認知的な意味合いを持たないと言えることになる。

## 2.5 Langacker (1987)

Langacker は Talmy の「図(F)」「地(G)」概念を継承しつつも、より知覚心理学における図地概念に近い概念を提案している。その規定は次のようなものである。

- (7) Impressionistically, the figure within a scene is a substructure perceived as “standing out” from the remainder (the ground) and accorded special prominence as the pivotal entity around which the scene is organized and for which it provides a setting.

(Langacker (1987: 120))

つまり、図は他の部分(すなわち地)から卓立した、特別な際立ちが与えられる部分であり、それが存在する状況を構成する中核ということになる。これは知覚心理学の規定に近い。その意味で、心理学的な裏づけを欠くということにはならない。しかしこの図地概念に基づいて(1)~(3)を図と地の反転と考えることには、やはり問題があるといわざるを得ない。その問題を明らかにするためには、知覚心理学で図と地の反転という概念が提示された背景について述べておかなければならない。

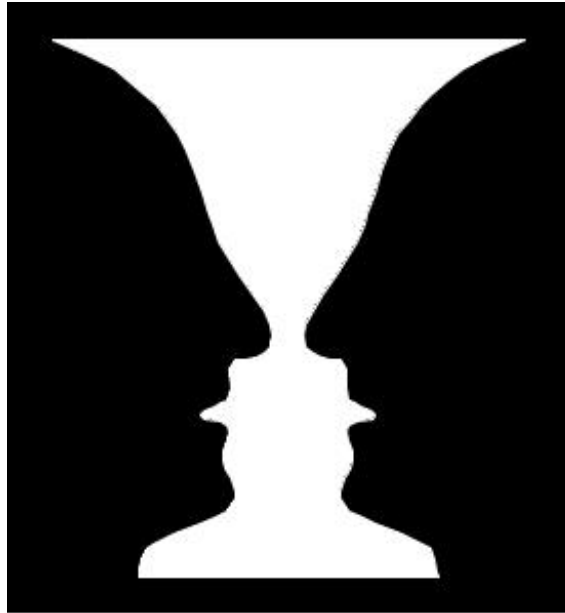
## 2.6 図と地の反転と恒常仮定

知覚心理学(ゲシュタルト心理学)において、図と地の反転は、恒常仮定(constancy hypothesis)に対する反例として提示された<sup>3)</sup>。

恒常仮定とは、「感覚刺激と知覚経験の要素との間には一対一の対応関係がある」すなわち「外部からの刺激が同じであればそこから得られる知覚経験も同じであろう」という仮説である。この過程が正しければ、知覚は脳の中に外部世界のコピーを作る過程ということになる。しかし、図と地の反転はこれに対する反例となるのである。次のよく知られた「ルビンの盃」を例に考えてみよう。これは、盃の形が図として知覚されたり、二人の人物の顔の形が図になったりする図形である。

この場合、図としてその存在が知覚されるものが盃になったり二人の人物の顔になったりするわけだが、このことは、同じ図形を見ていても知覚経験がひとつに定まらないということである。ここで重要なことは、どちらの知覚経験をしている場合でも、感覚刺激は同じである、ということである。そうであればこそ、これが恒常過程の反例となりうるのである。そしてさらに、感覚刺激が同じであるということは、どちらの知覚経験が得られている場合であっても、同じ人が同じ物を同じところから見ているということである。

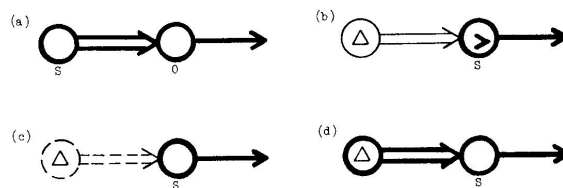
図と地の分化・反転に対する本稿の見方が妥当であるならば、(1a,c) を図と地の反転の例と考えることは、(1a)と(1b)、あるいは(1c)と(1d)話し手はどちらの文でも状況を同じ位置から経験して記述していると考えることになる。この議論は、(1a)が教師の実感をそのまま素朴に表現した文であるということや、(1c)が新幹線等の中から状況を述べているように感じられるのに対して(1d)が必ずしもそうでないこと、を説明できなくなる。また(2)に関しても、中間構文が普通の他動詞構文に較べてきわめて当事者感の強い表現であるということ<sup>4)</sup>を捉えることができなくなる。



### 3 アクション・チェーン分析とその問題点

#### 3.1 Langacker (1991: 335) のアクション・チェーン分析

次に、(3) についての Langacker (1991: 335) の分析を考えてみよう。Langacker はこれを、「アクション・チェーン (action chain)」という概念を採用して次のような図式で捉えることを提案している。



これは、「(3) はすべて共通の base(アクション・チェーンを含む) をもつ。各文の違いはその base のなかで profile される部分の違いである」と考えることになる。

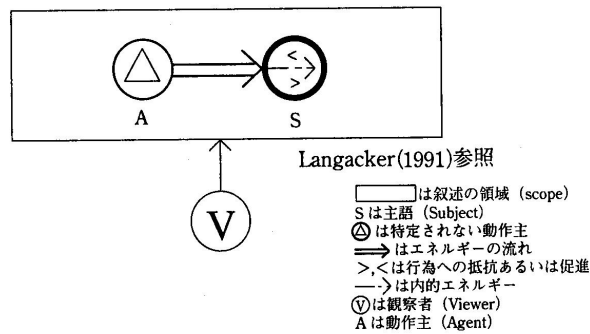
Langacker の認知文法における profile と base は、それぞれ知覚論における図と地に対応する。したがって、Langacker の分析も暗黙のうちに、(3) のすべてにおいて、話し手は同じところから (同一の視座から) 事態をみていると考えていることになるわけである。

しかも Langacker の分析の場合、その視座は、事態の当事者ではなく、そこから一步引いた観察者としての視座である。したがってこの分析も、中間構文が当事者感の強い表現であることを捉えることができない。

もっとも、Langacker の図式には話し手 (概念化の主体; conceptualizer) が書き込まれていない。そこで、図式の中の適切な位置に話し手を書き込めば問題は生じないと思われるかもしれない。しかし、実はそれでは問題は解決しない。

#### 3.2 概念化の主体を組み込んだ図式の問題点

吉村 (2000: 92) は中間構文の概念構造を次のような図式で捉えることを提案している。



この図式にはまず、話し手(ここでは Viewer がそれに当たる)の位置をこの図式のように想定することが妥当かどうかの問題がある。中間構文は当事者感を強く与える構文である。これは、この図式において Viewer が Agent と一致しなければならないことを意味する。

さらに、この図式が表現しているものは話し手にとっての見えではない。話し手には事態はこの図式のようには見えていない。そもそも話し手自身は Viewer としての自分自身の姿をこのような形で見ることができないはずである。

アクション・チェーン分析で採用されている図式のように事態を見ているのは、話し手ではなく、分析者であるわれわれである。そして話し手の言語知識の中に、分析者であるわれわれが占めるべき位置が確保されていると考えるのは不自然な想定である。

あるいは、分析者としてのわれわれ以外に、これらの図式が捉えているような知覚を経験する知覚者を話者の脳内に想定する立場もありうるかもしれない。しかしその立場は知覚心理学におけるホムンクルス理論と同じ構造をもつものであり、したがって佐々木(1993)が述べている、説明の無限後退というホムンクルス理論の問題点をそのまま受け継ぐことになる。

つまり、「(3)の文の違いはすべて共通の base の中の profile される部分の違いである」という Langacker の分析は、決して話し手の直観を捉えることができない。

#### 4 知覚現象としての図地分化

前節までで検討したアプローチに共通する特徴は、次の観点を適切な形で取り入れることができているということである。

- (8) a. 図と地の分化・反転は知覚現象である。すなわちそこには必ず(見えない)知覚者の存在がある。
- b. 図と地の反転は、同一の感覚刺激がつねに同一の知覚経験を生み出すわけではないということを示すものである。感覚刺激が同一であるということは、同一の対象を同一の視座から見ているということである。

(9) 図と地はともに知覚者の見えの中に含まれるものである。

つまり、知覚者を位置づけが適切になされていない分析ということになる。そのような分析は、認知意味論の黎明期に Lakoff (1987) がつよく批判した客観主義的な意味観に一步近づくものといえる。(10)に、Lakoff によるそのまとめを提示しておく。

- (10) その考え方 [=客観主義] を機能させようとする現代における試みでは、理性的な思考とは抽象的な記号の操作から成り立つものであり、これらの記号にそれぞれの意味が付与されるのは客観的に構築された世界、つまり、いかなる生物体の理解からも独立して存在する世界、との対応によってであるという前提がなされる。(Lakoff (1987: 序); 強調引用者)

## 5 本稿の立場<sup>5)</sup>

本稿は、(1a)と(1b)、(1c)と(1d)、(2a)と(2b)、(2c)と(2d)は、それぞれ同じ出来事を異なる視座から捉えて表現したものと考える。

たとえば(2a)は、動作主自身にとっての対象の見えを記述している。動作主自身の見えの中に、その動作主本人の姿は入っていない。そこで動作主は明示的な形では表現されない(エコロジカル・セルフ; Neisser (1988))。一方(2b)は、動作主自身の姿を見えの中を含むような視座の移動を伴う。その姿が一人称代名詞という明示的な言語形式で表現されている。

(1)、(2)の各ペアで話し手(概念化の主体)が事態を異なる視座から見ているということは、両者の場合において話し手にとっての感覚刺激も異なるということである。すでに述べたように、図と地の反転は感覚刺激が同一であることが前提としてあるわけであるから、本稿の分析ではこれらを図と地の反転の例とは考えないことになる。

### 5.1 一人称代名詞と視座の移動(他者の視座の獲得; Loveland (1984))

本多(2002)でも述べたように、視座の移動は話し手の姿が話し手自身の見えの中に含まれているかどうかと密接に関わっている。そしてそれはまた、一人称代名詞の有無とも関わっている。そこで、本節では、一人称代名詞の使用を支える視座の移動についての認知的な基盤について触れておきたい。

子供の言語発達過程における一、二人称代名詞の獲得と視点現象の関係を調査した Loveland (1984)によれば、人称代名詞の獲得に先立って、子どもは次のことを理解しなければならない。

- (11) a. 環境を見るとき視座は一つではなく、無数にありうること。
- b. 他者は子ども自身とは異なる観察点にいるものなので、他者にとっての環境の見えは自分にとっての環境の見えとは何らかのかたちで異なるということ。とくに
  1. 自分には見えないものが他者には見えている場合があるということ。
  2. 自分に見えているものが他者には見えていない場合があるということ。

Loveland (1984)は、子どもがこれについて理解している度合いと、子どもが一、二人称代名詞を正しく理解・産出できる度合いとが相関していることを示した。これは、一人称代名詞を支える視座の移動が、単なる空間移動の能力に基づく別の視座への移動ではなく、对人的ないし社会的な能力に基づく他者の視座への移動であることを示している。他者の視座への移動には他者についての理解が必要であり、他者の理解には相補的に自己の理解が伴う。つまり、Lovelandの知見は、一人称代名詞の成立基盤となる視座の移動の原点にあるのが、事物との関連で知覚されるエコロジカル・セルフではなく、他者との関連で知覚されるインターパーソナル・セルフ (Neisser (1988))であることを示唆する。インターパーソナル・セルフが視座の移動によって対象化され、視野の中に姿として存在するようになったものを指すのが一人称代名詞である。

ただし、インターパーソナル・セルフが対象化されたものとエコロジカル・セルフが対象化されたものは実体としては同一人物である。また、この2つの自己は、生後9か月から12か月の時期に「直接知覚される自己」として統合されていると考えられる<sup>6)</sup>。したがって、一人称代名詞はインターパーソナル・セルフだけと対立するのではなく、エコロジカル・セルフも含めた直接知覚される自己全般と対立することになる。

## 6 学史的な背景

### 6.1 言語に対する主体的立場と観察的立場

本稿のよって立つ立場を明らかにするために、ここで学史に言及しておきたい。ここで紹介したいのは、言語過程説(時枝(1941))で提唱されている、言語に対する立場の二分類としての、主



体的立場と観察者の立場の区別(時枝(1941: 21-38, とくに 22-24)である。

主体的立場とはわれわれが言語を表現・理解・鑑賞・価値判断する際の立場であり、別の言葉で言えば言語に対して行為的主体として臨む立場である。普通の談話文章において、言語行為を遂行、受容する際の立場はこれに当たる。それに対して観察的立場とは、言語を観察・分析・記述する際の立場、すなわち言語をもっぱら研究対象として把握し、これを観察し、分析し、記述する際の立場である。言語的行為の主体とならず、第三者として客観的に言語的行為を眺める観察者としての立場である。

両者の関連について、時枝は「観察的立場は、常に主体的立場を前提とすることによつてのみ可能とされる」(時枝(1941: 29))と述べている。時枝は、それまでの言語研究の問題の一端が、この二つの立場を区別しないことであつたことを指摘している。二つの立場の違いに無自覚であつたために、主体的立場を考慮しない純粋に客観的な観察に基づく記述・説明に走っていたわけである<sup>7)</sup>。

本稿に提示した議論の最も基本的な立場は、この時枝の主張に基づいている。ただし、時枝が言う「主体」は直接的には言語的行為の主体であるが、認知意味論の観点からはこれを認識の主体と捉えることになる。もっとも時枝は言語の意味を対象に対する話し手の捉え方に求めている(時枝(1941: 404-406))ので、言語的行為の主体に代えて認識の主体を考える本書の立場は、時枝の立場と齟齬を生じるものではない。

認知意味論(および言語過程説)においては、言語表現の意味は認識者・話者が対象をどのように捉えたかと切り離すことができない。しかし、認識者・話者が対象をどのように捉えたかということは、外部から客観的に観察可能なものではない。したがって研究者は、いったん話者・認識者の立場に立ったうえで、そのとき自らがどのように対象を捉えているかを経験し、それを踏まえてその経験を観察者として記述することが必要となる。

そしてここでもう一点重要なのは、言語においては話者・認識者は最終的には直接知覚される自己として存在しているということである。直接知覚される自己は見えの中には含まれず、したがって姿を持たないものである。このことは必然的に、話者・認識者が対象をどのように捉えたかについての主体的立場からの記述にも影響を与えることになる。

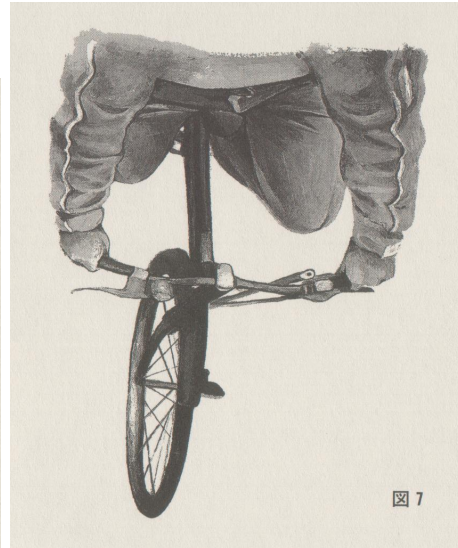
## 6.2 現象学における経験の記述

最後に注目しておきたいのが、現象学の考え方である。谷(2002: 177-179)は「超越論的自我は自転車に乗れるか」という問いに対して次の二つの図を用いて答えを出している。

谷は、自転車に乗る超越論的自我の絵画的な記述は、図6のようなものではなく、図7のようなものになると述べている。

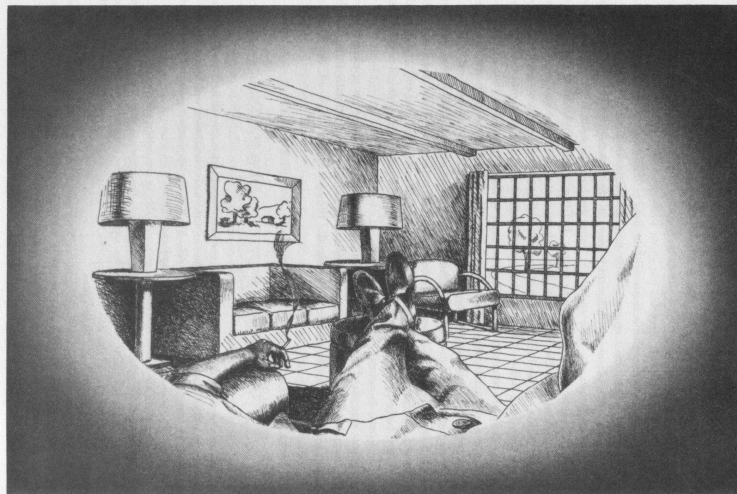
この二つの図は、自転車に乗るという経験についての二つの立場からの記述である。図7が行為の主体の立場からの記述であるのに対して、図6は行為の外部にいる観察者の立場からの記述である。図6は客観的な記述と見えるが、現象学ではこのような捉え方は図7のような直接経験から出発して事後的に形成されると考える。すなわち、図7のような経験こそが根源的であり、図6のような捉え方は派生的である。あるいは、図7で記述されるような「主観的」な経験が図6のような客観的な記述の前提となるのである(谷(2002: 177-179))。したがって、自転車に乗るという経験の記述は、図7のようなものを何らかのかたちで含まなければならないことになる。

これを時枝の言う観察的立場と主体的立場の区別との関連で言うならば、自転車に乗るという行為の主体的立場からの記述は図7のようなものである。したがって、先に述べた「観察的立場は、常に主体的立場を前提とすることによつてのみ可能とされる」(時枝(1941: 29))という時枝の立場は、現象学の立場と完全に一致している。時枝は現象学の影響を受けていたが、その一端がここにも窺われるわけである。



なお、現象学の源流の一つが Mach であることはよく知られているが、図7の超越論的自我の記述が Mach の視覚的自己に酷似していることも偶然ではない。

そしてこの Mach の自画像がエコロジカル・セルフの議論に登場してきたことから明らかなように、Mach は生態心理学とも関係がある。そして谷 (2002: 185) は、生態心理学と現象学に通じ合う面があることを指摘している。



本稿が重視する「見え」とは、対象が知覚者にとってどのように立ち現れるか、ないしは対象がどのように経験されるか、を捉えた術語である。本稿では、(1)~(3)を認知意味論の立場から論じるに当たっては、この「見え」を記述することが重要であると考えている。これは言い換えれば、主体的立場の記述を重視するということである。

## 7 まとめ

前節の議論を踏まえて述べなおせば、(1)~(3)についての「図と地の反転」「アクション・チェーン」による分析は、主体的立場と観察的立場の違いを考慮しなかったため、主体的立場を考慮しない純粋に客観的な観察に基づいて記述・説明したことによる問題をはらんでいることになる。それに対して本稿の立場は、観察的立場との違いを踏まえたうえで主体的立場を重視し、事態が話し手(概念化の主体)にとってどのように立ち現れるかを記述することに重点を置いているということになる。

## 注

- 1) 発表に関してコメントを下さった上原聡、池上高志、廣瀬幸生各先生ほかの皆様にお礼を申し述べたいと思います。
- 2) ただしこの場合、「地 (G)」にあたるものを *near the house* という前置詞句の表す範囲と考えれば、これは *what* ではなく *where* を使った疑問文で聞くものになることから明らかなように、「物」としての性格は薄れる。
- 3) ゲシュタルト心理学と恒常仮定については Reed (1988), Palmer (1990), 大山 (1992a, 1992b), 佐々木 (1993, 1994), 上村 (1994) を参考にした。
- 4) 話し手および聞き手にアフォーダンスの知覚者としての当事者感を強く与える構文であり、したがって、implicit agent には通常話し手が含まれる。坂本 (2002: 17-18) の *for*-phrase をめぐる議論などを参照。
- 5) 本節の議論は本多 (2002) に基づく。
- 6) 個体発達の観点から見ると、事物についての知覚と他者についての知覚は当初独立して成立するが、両者は生後 9 か月から 12 か月の時期に融合して「共同注意」と呼ばれる認知のあり方が成立する (Tomasello (1999))。
- 7) 言語過程説とは独立に、池上 (1997: 63) も「問題となる言語の習熟度と不釣り合いなレベルの論文を書くということは、認知言語学の場合は残念ながら不可能である」と述べているが、同様の問題意識によると考えられる。

## 参考文献

- Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, The University of Chicago Press, Chicago. (池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論：言語から見た人間の心』東京：紀伊國屋書店).
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II: Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- Loveland, Katherine A. (1984) "Learning about Points of View: Spatial Perspective and the Acquisition of 'I/You'," *Journal of Child Language* 11, 535-556.
- Neisser, Ulric (1988) "Five Kinds of Self Knowledge," *Philosophical Psychology* 1-1, 35-59.
- Palmer, Stephen E. (1990) "Gestalt Principles of Perceptual Organization," *The Blackwell Dictionary of Cognitive Psychology*, ed. by Eysenck, Michael W. 154-156, Blackwell, Oxford.
- Reed, Edward S. (1988) *James J. Gibson and the Psychology of Perception*, Yale University Press, New Haven.
- Sweetser, Eve E. (1996) "Changes in Figures and Changes in Grounds: A Note on Change Predicates, Mental Spaces and Scalar Norms," 『認知科学』 3-3, 75-86, (小原京子訳 (2000) 「図の変化と地の変化—変化述語、メンタル・スペース、尺度の基準に関する一考察」(坂原 (2000: 193-211))).
- Talmy, Leonard (1978) "Figure and Ground in Complex Sentences," *Universals of Human Language*, Volume IV: *Syntax*, ed. by Greenberg, Joseph H. 625-649, Stanford University Press, Stanford.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Volume I: Concept Structuring Systems*, The MIT Press, Cambridge, MA.

- Tomasello, Michael (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- 池上嘉彦 (1997) 「認知言語学のおもしろさ」. 『言語』 26-5, 68-73 (1997年5月号).
- 岩田彩志 (1994) 「メタファーと主題関係」. *Helicon* 3, 59-77.
- 上村保子 (1994) 「ゲシュタルト心理学」. 梅本堯夫・大山正 編, 『心理学史への招待—現代心理学の背景』, サイエンス社, (新心理学ライブラリ 15, 第13章).
- 梅本堯夫・大山正 編 (1992) 『心理学への招待—こころの科学を知る』, サイエンス社. (新心理学ライブラリ (1)).
- 大山正 (1992a) 「歴史と方法」. 梅本・大山 (1992: 1-27)(第1章).
- 大山正 (1992b) 「感覚と知覚」. 梅本・大山 (1992: 29-56) (第2章).
- 坂原茂 編 (2000) 『認知言語学の発展』, ひつじ書房.
- 坂本真樹 (2002) 「英語の Tough 構文への生態心理学的アプローチ」. 『日本認知言語学会論文集』 2, 12-22.
- 佐々木正人 (1993) 「認知科学の新しい動向<エコロジカル・アプローチへの招待> 2: 深みへの傾斜—センセーショナルリズムのステージ理論」. 『言語』 22-2, 84-89.
- 佐々木正人 (1994) 「ジェームズ・ギブソンエコロジカルな光学にいたる」. *imago* 5-2, 66-75.
- 谷徹 (2002) 『これが現象学だ』, 講談社.
- 時枝誠記 (1941) 『國語學原論』, 岩波書店, 東京.
- 本多啓 (2002) 「英語中間構文とその周辺—生態心理学の観点から—」. 西村義樹 編 『認知言語学 1: 事象構造』, 11-36, 東京大学出版会 (シリーズ言語科学 2).
- 本多啓 (2003) 「認知言語学の基本的な考え方」. 辻幸夫 編 『認知言語学への招待』, 63-125, 大修館書店 (シリーズ認知言語学入門第1巻).
- 吉村公宏 (2000) 「ハリデー文法と認知言語学—中間表現を巡って」. 小泉保 編 『言語研究における機能主義—誌上討論会—』, 75-103, くろしお出版.